

子どものための「みやざきの言の葉」講座を開催しました

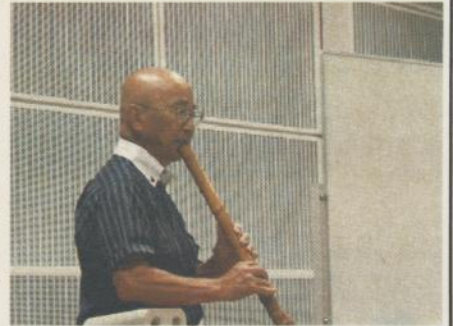
宮崎県は神話・伝承や昔話、自然の素晴らしさを歌った歌や民謡等が現代に伝えられてきています。本県の言語文化の継承・発展活動や読書活動の普及活動を推進し、先人の知恵や教を次世代に継承することを目的に、子どものための「みやざきの言の葉」講座を開催しました。夏休みに開催された4回の講座を御紹介します。

<第1回：「みやざきの歌や言葉を学ぼう」>

講師は、椎葉綾心塾塾長の綾部正哉さんです。

まず「言の葉」と「言葉」の違いについて触れ、「言葉」は記号であるが、「言の葉」は生きていて教えていただきました。生きていくということは、新しい言葉がいつか・どこかで・だれかによって生まれ、いつか姿を変え、人の心と心をつなぎ、いつか・なぜか死んでいく、ということだそうです。

その後、県民歌を声高らかに受講者と一緒に歌い、みやざきに伝わる子守唄や民謡、ことわざなどを教えていただきました。民謡では、椎葉の「ひえつき節」を紹介され、本来の労働歌のリズムと悲恋物語のリズムの違いを、尺八の音色で具体的に教えて下さいました。最後に宮崎に伝わる「屁ひりの嫁さん」の方言の語りがあり、皆さんもお笑いでした。



【ひえつき節を尺八で演奏する綾部さん】

<第2回：「みやざきの文学を学ぼう」>

講師は、若山牧水記念館館長の伊藤一彦さんです。まず、「奇数と偶数のどちらが好きですか？」と質問されました。1300年前に和歌が詠まれてからずっと、奇数である5・7・5のリズムは日本人にとって心地よいリズムであり、私達のDNAに刻み込まれているとお話がありました。

その後、自己紹介を短歌で考えて発表したり、県内の小学生や中学生の入賞作や俵万智さんの代表的な歌を例にとって、好きな歌を選び、その理由を発表するグループワークをしました。「当り前では面白くない。失敗したり恥ずかしい思いをしたりする経験をした時にこそ本当の自分を表現でき、いい歌が詠める」と、歌を詠むためのコツも教えて下さいました。また、牧水の短歌を通して、牧水の一生涯や人となりについての説明がありました。



【短歌の鑑賞について説明する伊藤さん】

<第3回：「みやざきの民話を学ぼう」>

講師は、南九州大学教授の矢口裕康さん、宮崎県語り部の会の林都子さん、赤澤照野さんです。

矢口先生から、宮崎の民話の特徴についての説明がありました。宮崎の民話には、雪国の民話とは違いがあり、例えば、かさ地蔵は一般的に雪が降るイメージがあるが、宮崎では雨が降る話として語り継がれているそうです。

その後、林さんが西都に伝わる民話「桜子物語」を、赤澤さんが「鬼子母神」を語って下さいました。どちらの民話も親子の愛を描いた話で、話の内容はもちろんのこと、しみじみとしたお二人の語りを聞いて涙する方もいらっしゃいました。また、赤澤さんは「琴ひきの松」、林さんが「夜泣橋」を、一文ずつ語っていただいた後に参加者全員で復唱し、民話語りのよさを体験しました。



【宮崎に伝わる鬼子母神を語る赤澤さん】

<第4回：「みやざきの神話・伝承を学ぼう」>

講師は、宮崎市神話・観光ガイドボランティア協議会の岡田勝運さんと原田俊子さんです。

はじめに、岡田さんから、宮崎の神話・伝承についての説明がありました。遠い昔、古代の人々は、「この世界を神が動かしている、石や木、海や空など、あらゆるものに神がいる」と思っていたそうです。（生きとし生けるものを大切に国民性にも反映しています。）

その後、岡田さんがイザナキ神話を、原田さんが海幸彦と山幸彦の神話の語りを聞かせて下さいました。どちらの神話も10分以上ある話でしたが、お二人の素晴らしい語りにより、皆さんも聞き入っていました。また、小学生全員で「ニギノミコトとコノハナサクヤヒメ」の神話を3行ぐらいつつ分担して朗読しました。



【イザナキのみそぎはらえを語る岡田さん】